ほ ぼ ぽ

輕唇音にして單子音の一つ。濁音にてぼと爲り重濁音にてぽと爲る時は重唇音に變す。清音のほが詞の中音また末音にある時は多く音便におと發音するを常とす。

ほ　ほの濁音。

ぼ　ほの重濁音。

ほ　穂(名)　〔一〕草の莖にて實の附きたる先のところ。○「稻の穂」「麥の穂」〔二〕又花などの附きたるところ。○「薄の穂」「蓼の穂」〔三〕細く尖りたる物の先。○「鎗の穂」「筆の穂」〔四〕波の高く立つところ。○「波の穂」〔五〕思の顏色にあらはるゝ事。○「穂に出でそめて」

ほ　秀(名)　穂づる事。又秀でたる處。○紀「千葉の葛野を見れば。百ちだる屋庭も見ゆ國の秀も見ゆ」

ほ　火(名)　ひの通音。多くは熱字として云ふ時に用ふ。「火影」「火串」

ほ　歩(名)　あゆみ。

ほ　畝(名)　うね。

ほ　帆(名)　布などにて作り船に張りて風を受けしむる道具。○「眞帆」「片帆」「白帆」「席帆」

ほ　補(名)　おさなふ事。

ほ　晡(名)　申の時。●夕暮。●日暮。

ほ　輔(名)　官名。大輔少輔の略。

ほい　布衣(名)　〔一〕中古近古にては總べて狩衣の一名〔二〕德川時代にては織文なき狩衣。……織文あるを狩衣といふに對して。〔三〕官服にあらざる平服をいふ。○穿穗「もとのり暫しほいになりて其裝束此學生に取らせよ」

ほい　本意(名)　ほんいの略。◎趣旨。●希望。●目的。

ほゐ　補遺(名)　漏れ落ちたる處を跡より補ふ事。……多く著書に云ふ。

ほいろ　焙爐(名)　木のわくを紙にて張り火に懸けて茶など乾かすもの。

ほいと　(名)　乞食。

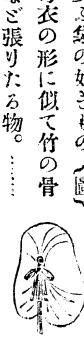
ほいなし　本意無(形。形狀言ク活)　不本意千萬。●せんかない。○落窪「今あらためかゝん事はほいなき事なり。

ほいん　母音(名)　語學上の詞。人の喉より舌、齒、唇等の助を借らずに出づる音聲にして。他の子

音を助け發音せしむるもの。あいうをお、やいゆをよ、わゐうゑを是なり。

ほろ

母衣。幌(名)　〔一〕武具の名。矢を防ぐため馬上にて背負ふ袋の如きもの。〔圖〕〔二〕母衣の形に似て竹の骨に紙など張りたる物。……車の幌の類。



ぼろ

襤褸(名)　切れ〳〵散り〳〵に爲りたる布、絹の類。●つぎはぎの衣類。●つゞれ。

ぼろ

梵論。暮路(名)　念佛を唱へあるく一種の乞食。足利時代のものにて後世虚無僧(こむそう)の類。又ぼろ〳〵とも云ふ。○職人歌合「法の月ひろくすまして武藏野におきゐるぼろの草枕かな」

ぼろぼろ

(感)　雉子の鳴く聲。△(副)―ぼろゝと。○永久百首「きぎすなく野邊を霞に包めどもぼろゝともれて聲の聞ゆる」

ぼろぼろう

(自動四段)　雉子のぼろゝと鳴きながら羽ばたきするを云ふ。○夫木「きゞすなく朝の原を過ぎゆけば早蕨あさりぼろゝうつなり」

ぼろぼろぐ

(他動下二段)　ぼろ〳〵にしたる。●ばらばらにしたる。○源氏「荷葉の方を合せたる名香、蜜をかくしぼろゝげて燒きにほはしたる」

ぼろぼろに

(名)　ぼろげに同じ。

ぼろぼろに

(副)　一說にはぼゝろにの意。一說にはちりぢりにの意。○萬葉「天雲をぼろに踏みあたし鳴る神も今日にまさりてかしこけめやも」

ぼろぼろ

(副)　〔一〕木の葉、涙などの散る音。〔二〕ぼろ〳〵涙をこぼして。○「ぼろぼろ泣く」〔三〕飯粒などの固まりて落ち散る有樣。……(又)―ぼろ〳〵と。○職人歌合「ぼろぼろとこそ音も泣かれけれ」

ぼろぼろ

(名)　虚無僧の類。……ぼろを見よ。○徒然「宿河原といふ處にてぼろ〳〵多く集まりて九品の念佛を申しけるに」

ぼろぼろ

(副)　〔一〕ばら〳〵に同じ。〔二〕ぼろ〳〵の〔三〕に同じ。

ぼろぼす

(副)　ぼろ〳〵に同じ。(又)―ぼろ〳〵と。

亡。滅(他動四段)　亡びしむる。●破壞する。

ほろり　（副）　涙の粒になりてこぼるゝ有樣。（又）—ほろりと。○「ほろりとこぼす一涙」

ぽろり　（副）　ぽろ〳〵に同じ。（又）—ぼろりと。

ぼろり　（副）　ぼろ〳〵に同じ。（又）—ぼろりと。

ほろがや　母衣蚊屋（名）　母衣に似たる形の蚊屋。竹の骨にて疊まるゝやうに作り日中など小兒を寐さする時に用ふるもの。

ほろよひィ　（名）　ほろゑひに同じ。

ほろげ　（名）　鷹の腋の下の毛。

ほろぶ　亡滅（自動上二段）　無くなる。●消ゆる。

ほろゑひィ　（名）　よいかげん酒に醉ふ事。●ほろよひ。

ほろみそ　法論味噌（名）　燒味噌を日に乾して胡麻、麻の實、胡桃、山椒などを切り交ぜたるもの。◎昔し奈良の寺院にて法論の時に食せしもの故に此名あり。○職人歌合「ほろみそ賣」

ほろし　痂子（名）　病の名。皮膚に小さく出來る粒々の瘡。

ほばら　（名）　魚の脇腹。

ほばく　捕縛（名）　捕へて縛る事。△（動）—捕縛す。

ほばしら　帆柱（名）　舟の中央にありて帆を支ふる柱。

ぼに　盆（名）　ぼんに同じ。七月にする佛の祭。○蜻蛉

ほにいだす　「ほになどする程になりにけり」穂に出だす（句）　色に出す。●外にあらはす。○古今序「花すゝき穂にいだすべき事にもあらずなりにたり」

ほにいづ　穂に出づ（句）　色に出る。●外にあらはるゝ。○古今「花薄われこそ下に思ひしか穂にいでゝ人に結ばれにけり」

ほにあぐ　（句）　聲を高く出だすをいふ。○大和「たまさかに訪ふ人あらば和田の原なげきほにあげていぬとこたへよ」

ほほ　ホホと發音する詞はほほの部にあり。

ほほ　（感）　輕く笑ふ聲。●女などの笑ふ聲。△（副）—ほゝと。

ほぼ　保姆（名）　幼稚園にて幼兒を保育する女教師。

ほぼ　略（副）　あらまし。●大方。●大抵。●やゝ。

ほほむ　含（他動下二段）　ふゝむ、ふくむに同じ。○散木「時鳥なかぬなげきの森に來ていとゞも聲をほゝめつるかな」

ほほむ　含（自動四段）　ふゝむ、ふくむに同じ。（雅）

ほばう　捕亡（名）　逃亡するを捕縛する事。

ほばうりやう　捕亡令（名）　大寶令の一部。

ほほゑむ　（自動四段）　〔一〕にこ〳〵する。●微笑する。●笑を含む。〔二〕花の咲きそむる。

ほべ　火瓮（名）　竈の下の焚火。○祝詞式「夜は火瓮なすかゞやく神あり」

ほへい　歩兵（名）　徒歩する兵。騎兵、工兵、砲兵等ならぬもの。

ほへう　ほひの處にあり。

ほど　陰（名）　女の隠し所。●陰門。（記）

ほど　程（名）　〔一〕時を大よそに指す詞。●とき。●時刻。●頃。●折。●間。●月日。●限り。●期限。○「程ふる」「夜の程」「三日四日の程に」〔二〕場所を大よそに指す詞。●ところ。●場所。●あたり。●へん。●間。●距離。○「近き程に海あり」「程せまき所にて」「千里が程」〔三〕多少、輕重、長短、淺深、强弱、度合等を大よそに指す詞。●程らひ。●加減。●ぐあひ。○新續古今「道遠き生野の霞幾重ともほどこそ知られ春の夕暮」源氏「よき程にかくてとぢめてんと思ふものから」〔四〕身分格式を大よそに指す詞。●身分。●位。●格。○源氏「同じ程それより下萬の更衣たちは」枕「家のほど身のほどに合はせて侍るなり」〔五〕風采、容貌、年齢等を大よそに指す詞。●樣子。●有樣。●恰好。○源氏「事好みしたる程よりはあやしう荒らかに田舍びたる心ぞつきたりける」同「齡の程いとほしければ」〔一〕くらゐ。●だけ。●の如く。●ばかり。○「花はど美しき事なし」〔二〕だけますます。○「行けば行くほど道けはし」

ほど　（後）

ほどろ　（名）　延び過ぎて葉になりかけたる蕨。莖の先のほうけたるもの。○山家集「なほざりに燒き捨てし野の早蕨は折る人なくてほどろとやなる」

ほどろ　ろは助辭にて程に同じ。●頃。●折。○萬葉「夜のほどろ我出で來れば」

ほどろに　（副）　はだらにに同じ。●まだらに。○萬葉「沫雪降れり庭もほどろに」

ほどろほどろに　（副）　ほどろにに同じ。●はだらに。●まだらに。○萬葉「沫雪のほどろ〳〵に降り敷けば」

ほとんほと　殆。幾（副）　ほとんどに同じ。○源氏「翁もほ

ほとほと

（副）〔一〕戸を叩く音。●とん〳〵。〔二〕戸を叩く如きすべての音。●とん〳〵。●はたと〳〵。……（又）―ほと〳〵と。

ぽとぽと

（副）〔一〕滴の大粒になりて落つる有樣。●ぽつぽつ。〔二〕紙などのしぼるまでに濡れたる有樣。……△（又）―ぽと〳〵と。

ほとほとし

（形。形狀言シク活）〔一〕ほとんど。……是はほとほとしくと副詞の形をなしたる時に限る。○土佐「ほとゝしくうちはめつべし」〔二〕殆んど危き場合に臨まんとするの意。●あやふし。●あぶなし。○後撰「久しう心地わづらひてほとほとしくなんありつる」

ほとぼり

（名）火氣。●熱。

ほとぼる

（自動四段）〔一〕熱する。●あつくなる。〔二〕賣る。（枕）

ほとと

（副）固き物など食ふ有樣。●ばく〳〵と。○今昔「搔栗をほと〻食ふ」

ほとゝぎす

時鳥。郭公。子規。杜鵑（名）鳥の名。脊薄黑く腹白くして夏の初め空を鳴きつゝ飛びわたる鳥。背の肉赤きが故に血を吐きて鳴くの諺あり。又支那にては蜀魂蜀魄など稱へて死人の魂の化したる鳥といへば。冥途に往復する鳥のよし歌などにはよまる。◎古人は其鳴く聲をほと〻ぎすと聞き取りて名づけたり。今はてっぺんかけたかなどと聞く。

ほとゝぎすの

時鳥（枕）飛ぶといふを鳥羽田に言ひ掛け又同じ音を重ねてほと〳〵に續けたり。○萬葉「ほと〻ぎす鳥羽田の浦に敷く波の」同「春さればすがるなす野の時鳥ほと〳〵妹に逢はず來にけり」

ほとり

邊（名）あたり。●はた。●そば。●近所。

ほとりばむ

（自動四段）端近なる。●淺はかなる。●輕々しくある。○源氏「もはら左樣のほとりばみたらん振舞すべきにもあらずとなんのたまひつる」

ほどばしる

迸（自動四段）走り流るゝ。●とばしる。●飛び出る。●飛び散る。

ほどなし

程無（形。形狀言ク活）〔一〕幾程もなき。●間もなき。●直に。〔二〕何程も無き。●低き。

●小さき。●狭き。○拾遺「海も淺し山も程なし」新拾遺「内も外も見ねぬ扇の程なきに涼しき風をいかでこめけん」

ほどらひ

（名）　程合。●あんばい。●ぐあひ。

ほとんど

殆。幾（副）　大方。●大よそ。●十中の八九まで。

ぼだう

母堂（名）　他人の母の尊稱。●御母上。●御母公樣。

ほどく

（他動四段）　結ばれたる物を解く。

ほどぐ

（自動下二段）　結ばれたる物の解くる。

ほとけ

佛（名）　梵語佛陀なるを轉じて支那にてはぶつと云ひ我國にてはほとけと云ふ。佛は覺の意にて智慧具足し三覺圓滿するもの〻稱。◎（一）佛教にて無上の位として尊信する神。（二）釋迦如來。（三）阿彌陀如來。（四）死人または其靈魂。（五）善心また善人の意。（六）米の異名。

ほとけつくり

佛作（名）　佛像を作る人。●佛師。

ほとけのくに

佛國（名）　極樂世界。●西方淨土。

ほとけのざ

佛座（名）　春の七草の一つ。土器菜また田平子に同じ。◎若葉の出づるさま蓮華の形に似たる故に云ふ。

ほとけのみち

佛道（名）　佛道。●佛法。●佛教。

ほとけのみな

佛御名（名）　彌陀の名號。

ほとけのみくに

佛御國（名）　佛の國に同じ。

ほとけのひ

佛の日（名）　死者の命日。

ほとけぶみ

佛書（名）　ぶっしよ。●經文。

ほとこぶ

（自動上二段）　濡れて柔かくなる。●ふやける。○伊勢「皆人乾飯の上に涙おとしてほとびにけり」

ほどころ

火處（名）　神事の場所にてする燒火。●庭火。○紀「火處たき」

ほどころる

（自動四段）　ばびころる。●ひろがる。

ほどこし

施（名）　ほどこす事。●施行。●喜捨。●慈善。

ほどこす

施（他動四段）　（一）あまねく行き渡るやうにする。（二）爲す。●行ふ。（三）惠み與ふる。●施行する。

ほどき

缶（名）　平たき皿。●盆。●平瓮。○空穗「白金のほどきすゑて御湯殿まゐる」

ぼち

墓地（名）　はか。●墓場。●墓所。

ぼち

（名）　點。●星。○「大の字にぼちを打てば犬となな

る」

ぽちぽち（名）　點々。●斑點。

ほり　堀（名）　〔一〕堀る事。〔二〕人工にて堀り通したる川。〔三〕城の周圍に堀りたる溝。

ほり　彫（名）　〔一〕彫る事。●彫刻。●彫物細工。〔二〕彫刻品。●彫物。

ほりゐ　堀井（名）　地を堀りて作れる井戸。

ほりゐど　堀井戸（名）　堀井に同じ。

ほりどめ　堀留（名）　〔一〕溝、堀などを川、海に通さずして途中にて留め置く事。〔二〕堀留になりたる土地。

ほりぬく　堀貫（他動四段）　水のある處まで地中を堀り通す。

ほりぬく　彫貫（他動四段）　板などの裏に通るまで彫刻する。

ほりぬき　堀貫（名）　堀貫井戸の略。

ほりぬきゐど　堀貫井戸（名）　地を堀り貫きて作れる井戸。

ほりわり　堀割（名）　〔一〕水を通す爲めに地を堀り割る事。〔二〕堀割にしたる場所。

ほりかは　堀川（名）　川または海まで人工にて堀り通したる川。

ほりえ　堀江（名）　堀川に同じ。

ほりあげ　彫上（名）　浮彫。

ほりき　濠（名）　城の周圍に堀りたる溝。＝堀の〔三〕に同じ。

ほりきり　堀切（名）　堀割に同じ。（和名抄）

ほりもの　彫物（名）　〔一〕彫刻。●彫刻品。〔二〕針にて人の皮膚に畫や字を彫り附くる事。○「金時の彫物」

ほりものし　彫物師（名）　〔一〕彫刻師。〔二〕人體の彫物を業とする人。

ほりす　欲（他動サ變）　願ふ。●望む。●希望す。○「見まくほりす」「知らまくほりす」

ほる　堀（他動四段）　地を穿つ。●土をかへす。

ほる　彫（他動四段）　きざむ。●彫刻する。

ほる　惚（自動下二段）　〔一〕とぼける。●ぼける。●ぼんとする。●ぼんやりする。○落窪「いかなる事か出て來んと思ひ嘆きてつら杖をつきてほれてゐたるを」〔二〕心醉する。●あつくなる。●戀慕をする。

ほる　欲（他動四段）　願ふ。●望む。●希望する。○萬

ほるど（名）　西洋酒の名。佛國ボルドー産のブランデー。

ほほ（名）　頰。動物の鼻口の兩側にありて膨れたる處。

ほほ（名）　朴。木の名。葉は柏に似てギザ〳〵なく夏の頃薄紫の花咲くもの。

ほほばる　頰張（他動四段）　頰の膨るゝ程食物を口に入るゝ。

ほほぼね　頰骨（名）　頰の上部に突出したる骨。〔参〕顴骨。

ほほべに　頰紅（名）　頰に附くる紅。

ほほてふ　鳳蝶（名）　揚羽の蝶。（和名抄）

ぼるど（名）　黑板。〔参〕塗板。

ほほかぶり　頰冠（名）　手拭を頭より頤にまはして冠る事。

ほほがしは　朴柏（名）　朴の古名。○萬葉「我脊子がさゝげてもてるほゝがしはあたかも似るか青き絹傘」

ほほかす（他動四段）　ほかす。〔参〕投げ捨て置く。〔参〕打ちやって置く。

ほほづゑ　頰杖（名）　手先にて頰を支ふる事。物を考ふる時。又は憂ある時などにする事。

ほほづき　酸醬（名）　草の名。夏の頃外皮に包まれたる丸き實を結び。熟するに從ひて赤き事朱の如し。女兒は之を取りて中の種をぬき口に入れて吹き遊ぶ。

ほほづきぢうちん　酸醬提灯（名）　紅色の丸き提灯。◎酸醬の實に似たる故の名。

ほほあて　頰當（名）　武具の名。頰より下に當つる鐵面。〔圖〕

ほほゆがむ（他動下二段）　事實に違へて語りなす。○源氏「式部卿の姫君に朝顏奉り給ひし歌などを少しづゝほほゆがめて語るも聞ゆ」

ほほゆがむ（自動四段）　噂の事實と違ふ。○源氏「すべて世の人の口といふものなん。誰が言ひ出づる事ともなく。おのづから人のなからひなど。打ちほゝゆがみ思はずなる事出でくるものなめるを」

ほほゆがみ（名）　〔一〕事實相違。〔二〕不行儀。○枕「見ぐるしきもの。夏晝寢して起きたる。云々。ようせずはほゝゆがみもしつべし」

ほほじろ　頰白（名）　鳥の名。鶯に似て大きく頰のあた

り白くして春の頃鳴く鳥。

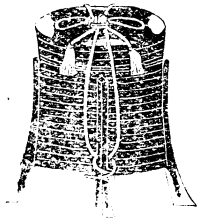
ほほがひげ 頬髭(名) 頬に生ひたる髭。

ほほがすけ 頬助(名) 老懸の一名。

ほわた 穂綿(名) 薄などの穂より出づる綿の如きもの

ほか 外(名) そと。⊗よそ。⊗他。⊗別。

ほかね 行器(名) 人に贈る時おこ食物を入る丶器。丸く塗りて三つ足を附け。今の重箱の處に使用せしもの。〔圖〕



ほかひ ほがふ事。⊗いはひ。

ほかひびと (名) 人の門に立ち其家の祝言を述べては物を貰ひ歩く、ゆゑ。○乞食。(和名抄)

ほかばら 外腹(名) 正腹の外の腹。⊗妾腹の子。

ほかほか 外々(名) よそ〳〵。⊗他。○源氏「皆ほかく へと出で給ふ程に」

ほかほか (副) ほかく に同じ。

ほかぼか (副) 暖かき有樣。(又)ーぼかく と。○ほかく と蒸す」

ほかそう 放下僧(名) 放下僧の略。

ほからほからと (副) ほがらかに。⊗ほのぐと。○古今「しの丶めのほからく と明けゆけばおのがきぬぎぬなるぞかなしき」

ほからか 朗 明らか。⊗晴れやか。△(形)ーほがらかなる。(副)ーほがらかに。

ほがふ (他動四段) 祝ふ。⊗祝する。⊗賀する。

ほかく 帆掛(自動下二段) 帆を揚ぐる。⊗渡海する。

ほかげ 火影(名) 「一」火の影。……燒火にても燈火にても云ふ。「二」火影に映じて見ゆる人の形。○源氏「そひふしたる御火影いとゞめでたく」

ほかげ 帆影(名) 帆の影。⊗影の如く遠に見ゆる帆。⊗遠帆。

ほかけぶね 帆掛舟(名) 帆を掛けたる舟。

ほかごころ 外心(名) 異心。⊗他意。

ほかあるき 外歩(名) 外出。⊗他行。

ほかざま 外樣(名) 外の方。⊗他方。⊗よその方。○竹取「射んとすれども外樣へいきければ」

ほかし (名) ほかす事。

ほかぜ 帆風(名) 帆を吹き送る風。⊗追風。

ほかす　（他動四段）　投げ捨つる。●打ちやって置く。

ぼかす　（他動四段）　染色などに云ふ詞。一方は濃くして段々に薄くする染方。○「紫にてぼかす」

ほよ　（名）　宿木の一名。ほやに同じ。（萬葉）

ほやョう　保養（名）　養生。△（動）―保養す。

ほた　榾（名）　木の切れ。●薪。○永久百首「こりつみしほたなかりせば冬深き片山里にいかで住ましし」

ほだ　穂田（名）　稻穂の出でたる田。○萬葉「秋の田の穂田を雁金くらやみに夜のほどろにも鳴きわたるかな」

ぼだい　菩提（名）　梵語。道の極まれるものを菩提と名づく。◎（一）佛道の奥處に達する事。○謠曲「佛果菩提に至るべし」（二）菩提を得んと希望する事。○「菩提のつとめ」

ぼだいかゴう　菩提講（名）　佛事の名。菩提を願ふための供養。○大鏡「靈林院の菩提講」

ぼだいごゑ　菩提聲（名）　念佛の聲。○槃花「殿上人の菩提聲」

ぼだいし　菩提子（名）　菩提樹の實。數珠に作るもの。○後撰「菩提子の數珠」

ぼだいしょ　菩提所（名）　一家の墓地のある寺。●檀那寺。

ぼだいしん　菩提心（名）　菩提を得んと望む心。●佛道に歸依する心。

ぼだいじゅ　菩提樹（名）　（一）佛教上最も尊崇せらるゝ木の名。一名を畢鉢羅樹。また一名を阿沛多羅と稱す。釋迦此木の下にて涅槃せし故に菩提樹の名あり。莖幹黄白にして枝葉青く、冬も夏も凋まぬものが涅槃の當日に至る毎に葉皆凋落し暫くして又もとに復すと云ふ。（二）しなの木の一名。深山に生じて葉は鋸齒を爲し夏の頃白き花さくもの。其皮は火繩などに造る。

ぼだいず　菩提樹（名）　（一）ぼだいじゅに同じ。（二）菩提樹の實の略。○元輔集「筑紫にて大貳の帝にぼだいず奉りあげらるゝに」

ぼだいずのみ　菩提樹の實（名）　ぼだいしに同じ。（落窪）

ぼたん　牡丹（名）　ぼたんに同じ。

ぼたに　穂立（名）　（一）稻穂の出づる事。○夫木「穂立する秋は來にけり」（二）穂の出でたる稻。

ぼだち

○新撰六帖「秋にあへる山田の穂立ふく風に」

ほたり

秀罇(名)　上古土器の一種。瓶の類にして口細く貧乏徳利の形したるもの。(紀)

ほたる

螢(名)　火垂(ほたる)の意。◎虫の名。蠅に似て尻より光を放ち夏の初め水邊に飛びあるくもの。

ほたるいし

螢石(名)　礦石の名。燃せば燐火を放つもの。

ほたるとり

螢取(名)　螢を取りに行く事。●螢狩。

ほたるがひィ

螢貝(名)　貝の名。螺の類にて内に光あるもの。

ほたるがり

螢狩(名)　螢を狩り遊ぶ事。●ほたるとり。

ほたるかご

螢籠(名)　螢を飼ひ置く小さき籠。

ほたるなす

螢成(形)　螢の如く。○紀「螢なすかゞやく神」△(枕)螢は見ねつ隠れつしてかすかなるものなればほのかの枕詞に用ふ。○萬葉「ほたるなすほのかに聞きて」

ほたるぐさ

螢草(名)　露草の一名。●月草。●かまつか。◎花の形螢の羽を擴げたるに似たる故の名。

ほたるび

螢火(名)　螢の放つ光。

ほたばら

穂俵(名)　海草の名。莖も葉も細かくして小さく玉の如き實あるもの。この名の米俵に緣あるが爲め正月飾物の一として用ひらる。古名はなのりそ。

ぼたん

牡丹(名)　灌木の名。春の末より夏の初にかけて花さくもの。花は白あり紅あり紫あり。又八重も一重もありて花中の最美なるものなれば支那にては花王と稱へ來れり。●異名は……ぼたに。●ぼうたん。●はつかぐさ。●ふかみぐさ。

ぼたん

鈕(名)　葡萄牙語より來る。物と物との合せ目を留むるため紐の代りに附くる丸きもの。常に洋服やシャツに用ひ上前に穴を明けて下前より之を通す。

ほたくひ

(名)　楷に同じ。ほたの切くひ。○いほぬし「ほたくひといふものを枕にして」

ほたてがひィ

帆立貝(名)　貝の名。北海に產し殼に溝あり。水中に浮ぶ時帆掛舟の行くに似たるもの。肉は食ふべく殼は常に貝杓子に作る。

ほだし

羈絆(名)　(一)馬を繫ぎとむる繩。(二)ほだす事。●束縛。●縛り繩。●手かせ。●足か

せ。●首かせ。

ほたび 榾火(名) 榾を燒きたる火。

ぼたもち 牡丹餅(名) 萩の餅の俗稱。

ほだす 羈。絆(他動四段) 繩にて繫ぎとむる。●捕縛する

ほれぼれし 惚々し(形。形狀言シク活) ぼけたる有樣。●ぼんやりとしたる。○源氏「年頃さまぐ〳〵の物思にほれ〴〵しくて」

ほれぐすり 惚藥(名) 他をして自身に戀慕せしめ得ると云ふ咒ひの藥。

ほれまどふ 惚惑(自動四段) 甚しくぼける。●茫然自失す。○榮花「御心もほれまどひて」

ほれこむ 惚込(自動四段) 頗る心醉する。●充分戀慕する。

ほぞ 臍(名) へそ。

ほそね 細菌(名) 草の名。菌の一種にして莖細く常に疊に作らるゝもの。●燈心草。

ほそばき 細脛(名) 細き足。

ほそどの 細殿(名) 廊。●廊下。

ほそぢ 帶落(名) ほうおちの略。

ほそめりぼね 細塗骨(名) 漆塗の細骨の扇。(枕)

ほそぬの 細布(名) 幅の狹き布。昔し陸奥の國の香婦(けふ)の里の名産たりしもの。……けふのほそぬのを見よ。

ほそる 細(自動四段) 細くなる。

ほそを 細緒(名) 箏の糸の稱へ。斗、爲、巾(どゐきん)の三絃を云ふ。

ほぞたち 帶落(名) 帶より落つる程に熟したる瓜。

ほそたび 細帶(名) 幅の狹き帶。

ほそわた 細腸(名) 小腸(しうちやう)に同じ。

ほそかはゞ 細川(名) 幅の狹き川。

ほそたにがはゞ 細谷川(名) 幅の狹き谷川。

ほそだち 細太刀(名) 公卿裝束の時に佩ぶる飾太刀の一種。螺鈿(らでん)または蒔繪にして常のよりは細く作りたるもの。勅許なくては佩ぶるを得ず。○辨內侍日記「公忠も細太刀ゆるされたるとゞ聞きし」

ほそだか 細高(名) 痩せて丈高き事。△(形)—細高なる。△(副)—細高に。○宇治「丈少し細高にて」

ほそね 細根(名) 細根大根の略。

ほそねだいこん 細根大根(名) 大根の一種。根の細き

ほそなが

細長(名)　〔一〕童男童女の着る古代の服。狩衣に似て襟に長き紐あり。身、左右の袖とも三幅にてオクビなきもの。……童男の時は下に指貫を用ひ。童女の時は袴を用ひず。〔二〕また女官の着る服。製法は同じにして オクビ無し。小袿の上に用ふ。

ほそらか

ほそやかに同じ。(形)—ほそらかなる。(副)—ほそらかに。

ほそむ

細(他動下二段)　細くする。

ほぞん

本尊(名)　ほんぞんの略。主として祭る佛像。

ほぞん

保存(名)　維持して保つ事。●元の形にして永く置く事。△(動)—保存す。

ほぞんぶつ

本尊佛(名)　ほぞんに同じ。

ほぞのを

臍緒(名)　へそのをに同じ。

ほぞぐづ

(名)　ほくそに同じ。

ほそくみ

(名)　草の名。半夏の一名。

ほそくび

細首(名)　首の細き處。—首に同じ。

ほそやか

ほそく。●ほっそり。●しなやか。(形)—ほそやかなる。(副)—ほそやかに。

ほそやぐ

(自動四段)　ほっそりする。●しなやかである。○源氏「昔よりは少しほそやぎてあてに」

ほそけ

(名)　我方に向ひ燒け來る火を防ぐため此方からも火を放つ事。●向ひ火。

ほそごゑ

細聲(名)　細き聲。●かすかなる聲。

ほそえい

細纓(名)　古代武官六位以下の着する冠の纓。糸筋の如く細く作りたるもの。〈圖〉

ほそえぼし

細烏帽子(名)　中古武士の兜下に着る烏帽子。また兜なしにも着る。〈圖、三〉

ほそさ

細さ(名)　細き事。●細き加減。

ほそき

(名)　草の名。—いたちはじかみに同じ。

ほそめ

細目(名)　〔一〕目を細くする事。○狹衣「細目あけて」〔二〕細き物の目。……布目、織目、編目、縫目すべてに云ふ。〔三〕細き透間。〔四〕細手。●細加減。

ほそみち

細道(名)　狹き道。●小道。

ほそみづ

細水(名)　幅の狹き流れ。●細川。

ほそし 細(形。形狀言ク活) 小さし。●狹し。

ほそびつ 細櫃(名) 古代衣櫃(きぬびつ)の一種。

ほそびき 細引(名) 麻にて綯ひたる繩。

ほっい 發意(名) 思ひ立ち。●發企。

ほっどう 法燈(名) 其宗旨にて棟梁と爲る僧を云ふ。○徒然「宗の法燈なれば寺中にも重く思はれたり」

ほっとう 發頭(名) 物事を首として起す事。

ほっとうにん 發頭人(名) 張本人。

ほつる (自動下二段) ほつるに同じ。織物の糸の亂れ解くる。

ほつが 發駕(名) 手紙の詞。旅立の敬語。●御出立。

ほったい 法體(名) 僧の身なり。●剃髮の姿。

ほったり (副) (一)大なる粒の滴り落つる音。(二)重く柔かなるもの、水に落込む音。(又)—ぽったりと。

ほったん 發端(名) はじまり。●糸口。

ほっそく 發足(名) 出立。

ほっさっうしゅう 法相宗(名) 佛法八宗の一つ。孝德天皇の御宇僧道昭の唐より歸り弘めたるところにて諸法諸相を判決するを以て主とせし

ほっつしめなば 帆筒締繩(句) 帆柱に筒を付けて帆綱を風により上げつ下ろしつ捌くを云ふ。○堀川「藻刈舟ほづゝしめなば心せよ川添柳風に波よる」新拾遺「夕なぎにほづゝしめなばくりさげてとまりけすらひよする舟人」

ほつらく 沒落(名) 國家、家、城等の亡ぶる事。△(動)—沒落す。

ほつねつ 發熱(名) 身体に熱氣の發する事。△(動)—發熱す。

ほっく 發句(名) (一)連歌また俳諧の發端の十七字。(二)十七字にて成りたる歌。連歌俳諧の發句より始まりて元祿の頃に至り芭蕉などの名家出でゝより短歌の一體と爲りたるもの……「物言へば唇寒し秋の暮」の類。

ぼっくり (名) 木をくりて作りたる女下駄。

ぼつぐっん 發願(名) 神佛に願立(がんたて)をする事。●立願。△(動)—發願す。

ぼつま 秀眞(名) 神代文字と言ひ傳へたる一體(字体は卷首に示す)。

ほつまぐに 秀眞國(名) 大和の國の美稱。(紀)

ほっけ 法華(名) (一)法華經。(二)法華宗。

ほっけゑ 法華會(名) 法華經を講ずる佛事。●法華八講。

ほっけしゅう 法華宗(名) 日蓮宗の一名。◎法華經の題目を稱ふる宗旨ゆゑに云ふ。

ほつご 發語(名) (一)文章の言ひ出しの詞……夫れ抑もの類。(二)詞の上に添ふる音。……「い渡る」「さ寢る」の類。

ほつごん 發言(名) (一)言ひ出す事。(二)言ひ出したる詞。

ぼっこう 勃興(名) 勃然とおこる事。△(動)—勃興す。

ほつえ 上枝(名) 上の方の枝。……下枝と相對す ○古今「我園の梅のほつえに」

ほっき 發起。發企(名) 思ひ立ち。●始めての企て。●發意。△(動)—發起す。

ぼっき 勃起(名) 急に事の起り立つ事。△(動)—ぼっきす。

ほっけう 法橋(名) 僧の格式。法眼の次に位するもの。

ほっし 法師(名) 僧—ほふしに同じ。

ほっしん 發心(名) 佛道に入るの心を起す事。●出家。

ぼつぜん 勃然(副) (一)急に事の發する有樣。(二)俄に怒る有樣。●むっと。(又)—勃然と。△(動)—發心す。

ほっす 拂子(名) 禪宗などにて僧の持つ道具。毛にて作れる塵拂の如きもの。

ほっす 欲(他動サ變) ほりすの轉。◎望む。●願ふ。

ぼっす 沒(他動サ變) (一)なくする。●埋むる。(二)取り上ぐる。……罪によりて領地などを。

ぼっす 沒(自動サ變) (一)ほろぶる。●消ゆる。●無くなる。(二)半分なくなる。●はまる。●おちいる。(三)死ぬる。

ほっすがひ 拂子貝(名) 海產植物の名。白くし 拂子の如く岩に根ざしたるもの。

ほね 骨(名) (一)動物の體を支へ持つ堅きもの。人類並に高等動物にありては深く皮肉に包まれ海老、蟹の類に於ては皮肉の外に現はれて身の鞘となる。(二)骨を働かすの意より勤勞の事に用ふ……「骨を折る」の類。(三)人類の骨の如く物事を支へ又は其中心の締りとなるもの……「扇の骨」「骨のある文章」などの類。

ほねぬき 骨抜(名) 魚類の骨を抜き去りたるもの。

ほねをり 骨折(名) 勞苦。●勤勞。

ほねをる 骨折(自動四段) 勞働する。●勤勞する。

ほねをしみ 骨惜(名) 勞力を惜む人。●不性者。

ほねがらみ (名) 骨まで害する惡性の黴毒。

ほねつぎ 骨繼(名) 骨の折れたるを繼ぐ術。および其醫者。

ほねぐみ 骨組(名) 〔一〕骨格。〔二〕重なる筋立。

ほねあがる 骨上(自動四段) 痩せて骨立つ。○散木「骨あがり筋さへ高き駒なれや」

ほなみ 穗波(名) 波の打つ如くそよぐ稻の穗。○月清集「山遠き門田の末は霧晴れて穗波に沈む有明の月」

ほら 法螺(名) 〔一〕螺に似て大きなる貝の名。尻に穴を明けてブウ〳〵と吹き鳴らすもの。……其用ひに三つあり(イ)佛具。山伏の山に入る時吹くもの。(ロ)軍陣の具。兵の進退を指揮する鳴物。今の喇叭の類。(ハ)寺または城などにて時刻の合圖に吹くもの。〔二〕法螺貝の大きなる聲もて人を驚かすに似たるより虛言を吐く事を云ふ。○「法螺を吹く」

ほら 洞(名) 岩または土中に明きたる空虛の穴。

ぼら 鯔(名) 魚の名。初は堀、溝などにて生れ長ずるに及び川より海に出て生活す。即ちいなの大きくなりたるものなり。又なよしとも云ふ。

ほらがひ 法螺貝(名) ほらの貝。

ほむ 譽(他動下二段) 賞譽する。●稱美する。

ほん 品(名) 親王の位階。一品より四品まであり。

ほん 本(名) 〔一〕もと。●根源。〔二〕本當。●まこと。●眞正。●純粹。〔三〕手本。〔四〕書物。〔五〕細長き物また草木などを數ふるに云ふ詞。○「二本の刀」「松の木一本」

ぼん 盆(名) 〔一〕平鉢の類。〔二〕緣淺く脚の無き膳。食器菜器など載するもの。

ぼん 盆(名) 〔一〕盂蘭盆の略。七月十三日より十五日まで行ふ佛式の先祖祭。〔二〕盆の祭に手向くる佛の供物。また僧への布施物。○枕「七月十五日盆を奉るとて」頭集「七月十五日盆もたせて山寺にまうづる所」〔三〕盆の祭をする時期。○「盆暮の拂」

ぼん 凡(名) 通例。●平凡。●凡俗。

ぼん 梵(名) 〔一〕梵天の略。〔二〕天竺または佛法。

ぼんい 本意(名) 思ふ通り。●主旨。●目的。●ほい。

ぼんゐん 本院(名) 上皇の數人おはします時。第一の院を申す稱。……後鳥羽、土御門、順德の三上皇の時に後鳥羽院を本院と申したるの例

ぼんばい 梵唄(名) 佛法上の唱歌。微妙の音聲を以て佛德を讃美するもの。

ぼんにん 本人(名) 當人。

ぼんにん 凡人(名) 凡俗の人。●十人並にて優れたる事なき人。

ぼんぼり (名) 扇の一種。中啓。〔二〕紙張の蓋ひある燈器。すなはち燭臺、手燭。

ぼんばう 本坊(名) 寺にて住職の起臥する室。

ぼんぽう 本邦(名) 我國。

ぽんど 磅(名) 英語より來る。〔一〕英國金貨の價一十シルリングを合はせたるもの。〔二〕西洋の秤り目。英米なるは我百二十匁七分四八に當り。和蘭なるは我百三十三匁九分五厘に當る。〔三〕英國の藥劑などに用ふる秤り目。十二オンスを合はせたるもの。即ち我九十九匁三分五厘八四。

ぼんだう 本堂(名) 寺にて本尊を祭りたる堂。

ぼんだう 本道(名) 〔一〕正道。〔二〕本往還。●本通り

ぼんどうろ 盆燈籠(名) 盆祭に佛前に釣る燈籠。

ぼんち 本地(名) 神佛の本身。……垂跡を見よ

ぼんち (名) 英語より來る。◎滑稽畫。

ぼんてうう 本朝(名) 我國。

ぼんぢやうちん 盆提灯(名) 盆祭に佛前に釣る提灯多くは白地に秋草などの畫をかきたるもの。

ぼんてうし 本調子(名) 三味線の調子の稱へ。二上り三下りに對して平常の調子を云ふ。

ぼんぢん 本陣(名) 〔一〕大將の居る陣屋。●本營。〔二〕宿驛にて大名の泊る宿屋。◎もとは陣屋の意にて武家時代の詞。

ぼんり 凡慮(名) 凡夫の考へ。●凡人の考へ。

ぼんりやう 本領(名) 本來の領地。

ぼんをどり 盆踊(名) 盆祭の日または夜。男女打混じてする舞踏。

ぼんをどりうた 盆踊唄(名) 盆踊に用ふる一種の唱歌。大皷にて拍子を取る。

ぼんたん 梵音(名) 梵唄に同じ。

ほんか 本歌(名) (一)引歌(ひきうた)……歌文の中に引く古歌の原文。(二)和歌。……連歌狂歌に對して云ふ。

ほむだ 譽田(名) 輌。(紀)

ほんたい 本體(名) (一)本よりの生れ素生(すなはう)。○濱松中納言物語「本體はおのづから聞かせ給ふやうも侍らん上野の宮と申し人世におはしましき。云々。娘一所おはしましければ。云々」(二)誠の姿。……神佛變化などに云ふ。○謠曲「同じくは本體を再び現はし給ふべし」

ほんぞ 本所(名) 所屬の官廳。❸役所。○平家「もとは小松殿の侍たりしが十三の年ほんぞへ參りたり」

ほんぞん 本尊(名) 主として祭る佛。……釋迦、阿彌陀、觀音の類。

ほんそう 奔走(名) 馳せまはる事。△(動)—奔走す。

ほんそう 凡僧(名) 官位無き僧。❸平僧。

ほんざゞう 本草(名) 維新前に云ひたる學科の名。植物學または藥物學。……但し動物礦物なども中に含まる。

ほんざゞうか 本草家(名) 本草學者。❸植物學者。

ほんぞく 凡俗(名) 通常の人。

ほむら 焰(名) ほのほに同じ。

ほんらい 本來(副) もとより。

ほんらいくう 本來空(句) もとより何も無きの意。(佛教)

ぼんなゝう 煩惱(名) 愛、慾、希望の如く衆生の心を迷はすもの。(佛教)

ぼんのくぼ 盆窪(名) 首の後ろの凹みたる處。○平家「烏帽子ぼんのくぼに押し入れて」

ぼんく 盆供(名) 盆の祭の供物。

ぼんぐゎ 盆畫(名) 盆石(ぼんせき)に同じ。

ぼんくわい 本懷(名) 本意。❸本望。

ぼんぐゎん 本願(名) 本來の祈願。

ぼんくやう 盆供養(名) 盆の祭。

ぼんやく 翻譯(名) 或る國の言語を他の國の言語にて寫し取る事。△(動)—翻譯す。

ぼんまる 本丸(名) 城にて大將の居るところ。

ぼんまつ 本末(名) 本と末と。❸始終。❹前後。

ほむけ 穗向(名) 稻穗を靡かせて此方へ向けしむる事。○新拾遺「亂れ芦の穗むけの風のかたよりに秋をそよする眞野の浦波」

ほんけ 本家(名) ほんもとの家。

ぼんげ 凡下(名) 平民。

ぼんけがへり 本卦返(名) 六十一歳の年齢を云ふ。◎六十一年目には生れたる年の干支と同じ干支に再び返る故の名。

ほんげん 本原(名) もと。◆みなもと。◆起原。

ぼんぶ 凡夫(名) 〔一〕佛教にて迷のある人を云ふ。○平家「佛も昔は凡夫なり我等も悟れば佛となる」〔二〕凡俗の人。

ぽんぷ 喞筒(名) 英語より來る。◎水を注ぎ掛くる器械。消防具などに用ふるもの。

ほんぶん 本分(名) 持前。◆役目。

ほんぷく 本復(名) 平癒。◆全快。

ほんご 反故(名) ほごに同じ。

ぼんご 梵語(名) 佛法上に傳はり來たる印度の言語。

ほんこく 翻刻(名) 同じ書畫を別い板本に彫り直す事。

ほんごく 本國(名) 生國。

ぼんぷ 盆繪(名) 盆石に同じ。

ぼんでん 梵天(名) 〔一〕印度の婆羅門教にて全能と尊信する神。〔二〕佛教にては天上の一世界。また其世界の主神梵天王の略。〔三〕修驗者の祈禱に用ふる御幣。◎梵天に奉るの意より出づ。

ぼんでんわう 梵天王(名) 二十天の一なる梵天の主神。(佛教)

ぼんでんこく 梵天國(名) 梵天の〔二〕に同じ。

ほんあん 翻案(名) 趣向を替ふる事。△(動)―翻案す。

ほんさい 本妻(名) つま。……妾に對して云ふ。

ほんざい 本才(名) 政治上の學問。○源氏「本才のかたぐ〳〵の物をしへさせ給ひしに」

ぼんさい 盆栽(名) 鉢植。◆鉢木。

ぼんさい 梵妻(名) 僧の妻妾。◆だいこく。

ほんざん 本山(名) 其宗旨を統轄する首座の寺。◆本寺。

ぼんさん 盆山(名) 鉢に石を入れて庭に置く裝飾品。

ぼんさん 梵讃(名) 梵語にて佛德を讃美する歌。

ほむき 穗向(名) 稻穗の靡きて此方に向く事。○萬葉「秋の田の穗むき見がてり」

ほんぎ 本紀(名) 歴史の筋立の主たる部分。帝王、皇室の記事。……列傳などに對して云ふ。

ぼんぎゃく 叛逆(名) 謀叛。

ほんみゃう 本名(名) 誠の名。

ほんみゃうミョウ 本命(名) 我生れたる年の干支。

ほんじ **ぼんじ** 本寺(名) 本山。

梵字(名) 梵天王の作りし文字の意。◎佛法上に傳はり來たる印度古代の文字。〈字體は卷首に示す〉

ほむしろ 帆莚(名) 帆に作る料の莚。●帆に作りてある莚。

ほんじょ 本所(名) 本領。(正統記)

ほんしゃうショウ 本性(名) 性質。●本心。

ぼんしゃうショウ 梵鐘(名) 寺の鐘。

ほんじゃうジョウ 本性。本上(名) 性質。●氣質。◎「上」は借字なれど物語書などには專ら本上の字を用ふ。

ほんしょく 本職(名) 本業。●專門の職業。

ほんしょく 本色(名) 特點。●特色。

ほんしん 本心(名) 正氣。●本氣。

ほんしゃ 本社(名) 〔一〕其主たる神體の祭りてある社。……末社に對しても云ひ。拜殿などに對しても云ふ。〔二〕其根本の會社……支社に對して云ふ。〔三〕我會社。●弊社。

ぼんじゃくしわう 梵釋四王(名) 梵天帝釋以下の四天王。(謠曲)

ほんしき 本式(名) 正式。

ほんもん 本文(名) 〔一〕主たる文句。……評、註、頭書などに對して云ふ。〔二〕格言として引くべき文句。……おもに經書などを云ふ。

ほんまうモウ 本望(名) 本來の希望。●かねての願ひ。

ほんせい 本誓(名) 本來の誓願。●祈誓。‖本願に同じ。

ぼんせつ 梵刹(名) 寺。

ほんぜん 本膳(名) 飯、汁、平、膾、香物を具へたる饗膳。

ほんせき 本籍(名) 我戸籍の所屬地。

ぼんせき 盆石(名) 盆の上に石と砂とを以て山水の形を置く一種の技術。●盆畫。

ほむすび 火產靈(名) 神の名。伊弉諾、伊弉册尊の御子にて火を司る神。●一名かぐつちの神。

ほう 鳳(名) 想像上の鳥の名。鳳凰。また天皇の御事に添へていふ。……鳳輦、鳳駕の類。

ほう 鵬(名) 想像上の大鳥の名。支那にて莊子に出で翼の直經三千里ありと云ふもの。

ほう 邦(名) 國に同じ。大國を云ふ。○「我邦」「東邦」

ほう　朋(名)　ともだち。
ほう　崩(名)　天皇の御死去。
ほう　峰(名)　山の高き處。みね。
ほう　烽(名)　のろし。◉烽火。
ほう　蜂(名)　虫の名。はち。
ほう　蓬(名)　草の名。よもぎ。
ほう　縫(名)　ぬふ事。
ほう　鋒(名)　刀の切先。
ほう　棒(名)　〔一〕杖の類。〔二〕筆にて引きたる線。
ほう　報(名)　〔一〕報酬。◉復讐。◉前世惡業の報い。〔二〕報知。
ほふ　法(名)　〔一〕方法。◉手段。〔二〕法則。◉規律。〔三〕法律。◉掟。〔四〕儀式。◉作法。〔五〕佛法。〔六〕幻術。◉魔法。
はう　方(名)　〔一〕かた。◉方角。◉方位。〔二〕四方の略。〔三〕方法。◉仕方。◉手段。〔四〕藥の所方。〔五〕方術。
はう　芳(名)　かうばしき事。◉かをり。
はう　袍(名)　古代貴族の裝束の名。〔一〕朝服の上着。文官のを縫腋袍と云ひ。武官のを闕腋袍と云ふ。製法異なり。〔縫腋および闕腋の處に圖を示す〕服色は大寶令の制。一位二位深紫。三位淺紫。四位深緋。五位淺緋。六位深綠。七位淺綠。八位深縹。初位淺縹なりしが後種々の沿革ありて一條天皇の頃よりは。四位以上すべて黑。五位赤となる。地は綾にて種々の模樣を織り出だせり。◉うへのきぬ。〔二〕雅樂にて樂人舞人の着る上着。……廣袖なるをも筒袖なるをもすべて云ふ。

はう　苞(名)　藁などにて包みたるもの。◉つと。
はう　砲(名)　軍器の名。大砲。
ばう　亡(名)　死したる事。◉死したる人。
ばう　望(名)　太陰曆十五夜。又は十五日。
ばう　坊(名)　市街。◉市中の一區畫。
ばう　坊(名)　〔一〕東宮坊の略。皇太子の御所。〔二〕東宮殿下。
ばう　坊(名)　〔一〕僧侶の住家。◉僧房。〔二〕僧侶。
ばう　帽(名)　〔一〕烏帽子。〔二〕綿帽子。〔三〕現今男女の用ふる冠物。
ばう　暴(名)　亂暴。
ほうい　布衣(名)　ほいに同じ。
はうゐ　方位(名)　方角に同じ。東西南北の類。

ほふいん 法印(名) 〔一〕僧の格式。僧正に相當したる最上等の位。〔二〕山伏の一名。

ばういん 暴飲(名) 亂暴に酒を飲む事。△(動)—暴飲す。

ほういのやく 布衣の役(名) 德川時代。將軍家參内などの時狩衣を着し劔を持ちて供する役。

はういく 保育(名) 幼稚園にての教育。△(動)—保育す。

ほふろん 法論(名) 佛法上の討論。●論議。

はうろく 焙烙(名) 豆など煎るに用ふる素燒の土鍋。

はうろくてうれん 焙烙調練(名) 各人頭に小さき焙烙を戴きて擬戰をなし。之を破られたるものは戰死者として退場する仕組の調練。

はうろくむし 焙烙蒸(名) 料理の詞。二つの焙烙を合せ其間に入れて蒸す事。又は其蒸したる食物。

はうろくびや 焙烙火矢(名) 彈丸の一種。布にて被ひ漆塗りにしたる銅製の破裂彈。

はうばい 傍輩(名) ながま。●友だち。

はうはつ 砲發(名) 大砲にて攻擊する事。(動) 砲發す。

ばうはつ 暴發(名) 俄に騷動の起る事。△(動)—暴發す。

ぼうばな 棒鼻(名) 宿驛の兩端。

ばうはん 謀判(名) 僞判。●似せ印。

はうにん 放任(名) 一切打ち任する事。●打捨てゝ勝手にさする事。△(動)—放任す。

はうぼふ 方法(名) てだて。●手段。●仕方。

はふはふ 這々(副) 辛うじて。●漸くにして。○賴政集「翁さびばふばふのぼる盆山」

はうぼう 魴鮪(名) 魚の名。頭大きく色は赤に黑みを帶び其肉は白くして味美なり。

はうぼう 寶棒(名) 神佛の惡魔を打ち懲らす爲めに手に持つ棒。

ばうばう 蓬々(副) 草又は髮毛などの亂れ生ひたる有樣。(又)—蓬々と。

ばうばう 茫々(副) 限なく廣々としたる有樣。(又)—茫々と。(形)茫々たる。

はふはふのてい 這々の體(名) 辛うじて逃ぐる体裁。

はうへい 奉幣(名) 朝廷より神に幣を捧げ給ふ事。

はうへいし 奉幣使(名) 役の名。奉幣のための勅使。

はうへん　褒貶(名)　褒める事と貶す事と。△(動)—褒貶す。

ほふべん　法便(名)　法便は借字。放免の通音なり。檢非違使廳の下部。

はうべん　方便(名)　〔一〕佛の衆生を導く爲に施す假の手段。〔二〕又すべて手段。●方法。●策略。

ほうど　(副)　物を落し物を投げ物を打ち又は物に突きあたる類の音。●とんと。●どしんと。○枕「車やどりに入れて轅(ながえ)ほうと打ちおろす」

ほうど　封土(名)　大名の領地。

ばうど　暴徒(名)　亂暴者の徒黨。

はうたう　放蕩(名)　身持ちのよからぬ事。●道樂。

ほうたふ　報答(名)　〔一〕返答。●返事。〔二〕復讐。●報恩。△(動)—報答す。

はうたう　(名)　食物の名。饂飩(うどん)の音便。

ほうだう　報道(名)　報知。●報告。●通知。△(動)—報道す。

ばうどう　暴動(名)　徒黨して亂暴する事。●△(動)—暴動す。

ほうち　封地(名)　封土。

ほうち　報知(名)　報告。●報道。●通知。△(動)—報知す。

はうちやう　庖丁(名)　〔一〕料理人。●庖丁師。〔二〕料理。●割烹。〔三〕庖丁師の用ふる刄物。肉又は野菜を切るに用ふ。……字は庖刀とも書く。

ほふでふ　法帖(名)　名家筆蹟の手本。

はうぢやう　方丈(名)　〔一〕寺院の室の名。住持の常に住むところ。◎一丈四方に作るの意。〔二〕住持。●和尚。

ばうちやう　膨脹(名)　ふくるゝ事。△(動)—膨脹す。

ばうちやう　傍聽(名)　傍にて聽く事。△(動)—傍聽す。

ばうちやう　暴漲(名)　河水などの俄に漲る事。△(動)—暴漲す。

ほうでううろこ　北條鱗(名)　紋の名。北條時政などの附けたる三つ鱗。初め相州江島辨財天より賜はりたる紋といふ。

はうちやうし　庖丁師(名)　料理人。

はうちく　放逐(名)　逐ひ出す事。△(動)—放逐す。

はうちやく　寶鐸(名)　風鈴の大なるもの。常に佛堂又

は塔の軒端に懸く。

はふり はの部を見よ。

はうり 方里(名) 一里四方。

はうりゃう ・方領(名) 裝束の襟の一種。素袍直垂などの類の角なる襟。……たりくびを見よ。

ほふりつ 法律(名) 其國の主權者によりて定められ一般人民の服從すべき規則。

はうりゃく 方略(名) 謀略。●手段。

はふりこ はの部を見よ。

ほふる (自動四段) ばふるに同じ。

ほうおん 報恩(名) 恩がへし。

はうおんかう 報恩講(名) 眞宗にて十一月廿二日より廿八日まで執行する宗祖親鸞上人の祭。又御講ともいふ。

ほうわう 鳳凰(名) 想像の鳥の名。頭は鷄、背は龜に似、燕の頷、蛇の頸、魚の尾ありて羽翼は五色もて彩られたると云ふもの。聖人の世に出づる兆といふ目出度き鳥。

ほふわう 法皇(名) 僧體に爲り給へる上皇。

ほふわう 法王(名) 羅馬教の主權者。

ほうわうまる 鳳凰丸(名) 紋の名。鳳凰の形を圓形に畫がきたるもの。

ばうをく 茅屋(名) 〔一〕茅葺の家。●草の屋。●あばら屋。〔二〕手紙に自宅を謙遜していふ。

はうか 放下(名) 放下僧の略。

はうが 萌芽(名) 萌え出でたる芽。

ほうが 奉加(名) 神佛へ金などを奉納すること。

ばうがい 妨害(名) 妨ぐる事。●邪魔する事。△(動)妨害す。

ほうがちゃう 奉加帳(名) 奉加の金額と人員を記す帳面。

はうかぞう 放下僧(名) 放家僧(名) 田樂の一種。僧體にして鞨鼓を打ちサヽラを摺り歌ひ舞ふもの。

ほうかん 幇間(名) 遊興の席に侍して客を取持つ人。●太鼓持。●男藝者。

はうかん 芳翰(名) 手紙の詞。他人の手紙の尊稱。

ばうかん 坊間(名) 市街。●市中。

ほふがく 法學(名) 學科の名。法律を研究する學。

はうがく 方角(名) 東、北、南、西などの方位。

ばうかく 暴客(名) 亂暴人。

はうかし 放下師(名) 放下僧に同じ。

ほうえう 蜂腰(名) 〔一〕蜂の如き細腰。腰折の謎にて

未熟の和歌。

はうやう 放鷹(名) 鷹狩。

はうやうらく 放鷹樂(名) 雅樂の曲名。

ぼうよみ 棒讀(名) 漢文を訓點つけずに音讀する事。

はうたい 繃帶(名) 醫術上の詞。傷所を卷く布。

はうだい 砲臺(名) 臺場。

はうだい 放題(名) 成り行きに任する事。○「氣儘放題」「言度放題」

ばうだい 傍題(名) 歌學上の詞。題意を客として他の意味を主とせしもの。

ぼうだら 棒鱈(名) 鱈を棒の如く乾し固めたるもの。

ぼうたん (名) 〔一〕灌木の名。牡丹に同じ。〔二〕重の色目の名。表白、裏紅梅。又一種。表薄赤。

ほふだん 法談(名) 佛教の講談。●談義。●說法。●說教。

はうだて 方立(名) 〔一〕門の扉の兩方の柱。◎ほこだての音便にて鉾のやうに立ちたるの意。(和名抄)〔二〕籠の左右にある柱の如きもの。○平家「籠の方立うちたゝき。閂をどっとぞ作りける」〔三〕御所車の簾より外に差し出でたる左右の處。○雅亮裝束抄「車の方立の上二三寸」

ほふれい 法令(名) 法律布令。●政府の規則。

ばうれい 亡靈(名) 死人の魂。●亡魂。●幽靈。

ほふれいわた 法令綿(名) 綿の一種。◎多くは大和の國法令といふ地より出でたる故に云ふ。

はうれいわた 芳禮綿(名) 法令綿に同じ。

ほうれん 鳳輦(名) 天皇乘御の車又は御輿。屋形の頂に鳳凰の飾あり。

はうれんさう 菠薐草(名) 草の名。其根は赤くして食ふべく浸物などにして用ふるもの。

ほうれき 鳳曆(名) 手紙の詞。目出度き曆の意にて新年の異名に用ふ。○「鳳曆の嘉慶」

はうそ 寶祚(名) 天皇の御位。

はうそ (名) 木の名。柞(はゝそ)に同じ。

はうさう 瘡瘡(名) 病の名。豆の如き瘡を發するもの。又天然痘と云ふ。

はうざう 寶藏(名) 寶物を入るゝ倉庫。

ばうぞく 凡俗(名) 平凡なる事。●品格に乏しき事。●物なれぬ事。(源氏)

ばうぞく (形)—ばうぞくなる。(副)—ばうぞくに。放俗、凡俗、傍側、飽足、暴側など古來種々の

漢字を當てゝ註すれども皆牽強附會なり。たゞじだらく不行儀などの意に心得てあるべし。○源氏「二藍の小袿ないがしろに着なして紅の腰引き結べる際まで胸あらはにばうぞくなるもてなしなり」同「人多く見る時なん透きたる物着たるはばうぞくに覺ゆる」

ぼうね 棒根(名) 草の根の一種。牛蒡などの如く下へ眞直に向ひ延びる根。

ほうねん 豐年(名) 穀物のよく出來る年。●豐作。

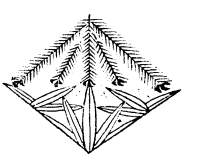
はうねん 放念(名) 手紙の詞。念慮に懸けぬ事。●放神。●放慮。●安心。

ほうらい 蓬萊(名) 蓬萊山の略。

ほうらいかざり 蓬萊飾(名) 正月の祝として三方臺に米を盛り其上に熨鮑、昆布、搗栗、穗俵などの類を飾りたるもの。

ほうらいざん 蓬萊山(名) 想像上仙山の名。東海の東にありて高さ一千里、周圍五十里。上に太山眞人の住む仙宮あり。宮室皆金玉を以て作ると支那の古書に見ゆ。

ほうらいびし 蓬萊菱(名) 模樣の名。蓬萊山の松竹鶴亀などを菱形に畫かきたるもの。



〔圖二種〕

はうらつ 放埒(名) 身持のよからぬ事。●放蕩。●遊蕩。

ほうらく 法樂(名)神前佛前に音樂歌舞を奏して手向くる事。○謠曲「法樂の舞をまふべきなり。はやしてたべや人々よ」

ほふむ 法務(名) 佛法上の事務。●寺務。

はうむり 葬(名) 葬る事。●葬送。●埋葬。

はうむる 葬(他動四段) 死體を墓地に埋むる。●葬送する。●埋葬する。

ばうう 暴雨(名) 俄雨。

ほうなふ 奉納(名) 神佛へ物を奉る事。△(動)—奉納す。

はうのもの 箔物(名) 金箔などにて繪をかきたる土器。又下土器(したかはらけ)とも云ふ。

ほうく（自動下二段）ぼくに同じ。ぼける。●ぼんやりする。

ほうぐ（名）反故に同じ。紙屑。●書きふるし。

ほうくわ　烽火（名）〔一〕のろし。〔二〕火焔。

はうくわ　半靴（名）古代の沓の一種。深沓の頭短きもの。

はうくわ　放火（名）附け火。△（動）—放火す。

ほふくわい　法外（名）無條理。●無法。●非常。△（形）—法外なる。（副）—法外に。

はうくわい　方外（名）僧侶、醫者等の類を武家より云ふ稱。

はうぐわん　判官（名）撿非違使尉の異名。○「九郎判官源義經」

はうくわん　傍官（名）同僚。○千載「傍官ども加階し侍るを聞きて」

ばうくわん　傍觀（名）傍にて觀て居る事。△（動）—傍觀す。

ばうぐわん　坊官（名）東宮坊の官吏。

はうぐわんだい　判官代（名）院の御所の官名。—はんぐわんだいに同じ。

ばうくわう　膀胱（名）臟腑の一つ。●小便袋。

ばうくん　亡君（名）死したる主君。

ばうくん　暴君（名）暴虐なる主君。

ばうくん　傍訓（名）漢字の右に附けて讀方を示す假名●振り假字。

はうけい　寶髻（名）古代貴女結髮の稱へ。垂れたる髮を項の上にあげて瘤の形に作るを云ふ。內親王、內命婦など禮服の時の結髮にして此上には釵子を刺す。（圖）

はうけい　方形（名）四角なる形。

はうけほうけと（副）ぼけたる有樣。○宇治「入道の君とてほうけ〳〵として」

ほうけづく（自動四段）佛くさくなる。○源氏「吉祥天女を思ひかけんとすればほうけづきくすしからんこそ又詭しかりぬべけれ」

はうけん　寶劍（名）寶物の刀劍。●寶刀。

ほうけん　封建（名）領地を大名に與へて其人民を統御せしむるの政體。すなはち德川時代の制度。

ほふげん　法眼（名）僧の格式。法印の次に位するもの。

はうげん　方言（名）其地方一部に行はるゝ言語。●土

地言葉。●國言葉。

はうげん 放言(名) 言ひたき儘に物言ひ散らす事。△(動)—放言す。

ばうげん 妄言(名) 妄りなる言語。

ばうげん 暴言(名) 亂暴なる言語。

はうげき 砲擊(名) 大砲にて攻擊する事。△(動)—砲擊す。

はうげしゃく 方解石(名) 礦物の名。石灰質にして其色種々あり。之を粉碎するも毎に立方體をなす故に名あり。●意名は……霰石。●寒水石。

ばうふ 亡父(名) 死したる父。

ばうふ (名) 草の名。=防風に同じ。

ばうふ 防腐(名) 腐敗を防ぐ事。

ぼうふり (名) ぼうふりむしの略。

ぼうふりむし 子子(名) 水溜りに湧く赤き小虫。金魚の餌に用ふるもの。蛹化すれば蚊と爲る。◎其水中にて泳ぐ時棒を振る形に見ゆる故に名づく。

はうぶる 葬(他動四段) ぼうむるに同じ。

はうふつ 髣髴(副) よく似寄りたる有樣。△(形)—髣髴たる。

はうぶつ 方物(名) 土地の産物。

ぼうふら (名) ぼうふりむしに同じ。

ぼうぶら (名) かぼちゃの一名。

ばうふう 暴風(名) 暴き風。●大風。●はやち。

ばうふう 防風(名) 草の名。葉は芹に似、根は牛蒡に似たり。料理にて刺身のつまなどに用ふるもの。

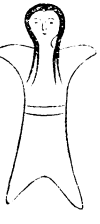
ばうふうう 暴風雨(名) 烈しき雨風。

はうふく 抱腹(名) 腹を抱へて笑ふ事。△(動)—抱腹す。

ほふぶく 法服(名) 僧の服。●ころも。

ほふふくすがた 法服姿(名) 法服を着用したる容體。○家長日記「入道やゝ待たれて新三位定家朝臣に扶けられて參上る。云々。褥の上に屈まり居られたりし法服姿いつ忘るべしとも覺ねず」

はふこ 這子(名) 小兒の這ふところの體を張子にて造りたる玩具の人形。



はうこ（名）●御伽這子。●あまがつ。〔圖〕

ほうご（名）草の名。母子草の略。反故に同じ。紙屑。●書さふるし。

はうこん（名）方今（副）當今。●現今。●今日。

ばうこん　亡魂（名）死人の魂魄。

ほうこう　奉公（名）君または主人に仕ふる事。

はうかう　方向（名）向き方。●目途。●目的。

はうがう　寶號（名）佛の御名。

ばうかう　暴行（名）亂暴なる所行。△（動）—暴行す。

はうこく　邦國（名）國。●國家。●諸國。

はうこく　報國（名）國恩に報ゆる事。

はうこく　報告（名）報道。●報知。●通告。●知らせ。△（動）—報告す。

ばうこく　亡國（名）（一）國の亡ぶる事。（二）亡びたる國。

はうこぐさ（名）草の名。母子草の音便。

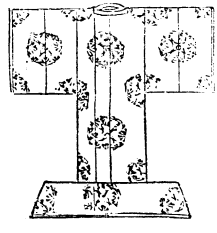
ほふゐ　法會（名）佛事。●供養。

ほふゑ　法衣（名）法服に同じ。僧のころも。

はうえ　胞衣（名）ね。

ばうゑんきやう　望遠鏡（名）遠きものを近く見する眼鏡。

ほうえき　縫腋（名）袍の一種。文官の着るもの。腋は縫ひ塞ぎて左右の裾にビラ〳〵したる袋の如きものを附く。之を襴と稱ふ。……なほ袍を見よ。



〔圖〕

ぼうえき　貿易（名）外國と賣買すること。●交易。

ほふてい　法庭（名）裁判所。

はうでん　寶殿（名）神殿。●神社。

はうてき　放擲（名）拋ちて少しも顧みぬ事。△（動）—放擲す。

はうあん　方案（名）下拵へ。●地組み。●豫定案。●設計。

ばうざ　病者（名）病人。●患者。

はうざい　方劑（名）所方の藥劑。●調劑。

ばうさい　亡妻（名）死したる妻。

ほうざい　奉財（名）金錢を神佛に寄進する事。

ばうざい 防材(名) 軍事上の詞。海軍にて港口の防禦の爲に造る柵の如きもの。

ぼうざたう 棒砂糖(名) 砂糖の一種。◉棒の如く固めたるもの。

ぼうさつ 謀殺(名) 兼てより殺さんと企てゝ人を殺す事。

はうさん 寶算(名) 天皇の御齡。◉聖算。

はうさん 放散(名) 科學上の詞。熱を放ち散らす事。△(動)—放散す。

ほうさく 豐作(名) 穀物のよく出來る事。◉豐年。◉藹作。

はうき 箒(名) 塵を拂ふ道具。

ほうき 蜂起(名) 蜂の群れ起つ如く人民一揆などの起る事。△(動)—蜂起す。

はうきぼし 箒星(名) 箒に似たる光を曳く星。◉彗星。

ほうぎょ 崩御(名) 天皇の御死去。

ばうきょ 暴擧(名) 亂暴なる擧動。

ばうぎょ 防禦(名) ふせぎ。△(動)—防禦す。

ほうきょう 豐凶(名) 豐年と凶年と。

ほうきゃうう 封境(名) 大名の領地の境界。

はうきゃうう 方磬(名) 樂器の名。磬の一種。

はうきゃうう 方鏡(名) 四角なる鏡。

ばうきゃく 忘却(名) 忘るゝ事。△(動)—忘却す。

ばうぎゃく 暴虐(名) 亂暴に虐ぐる事。

はうきぐや 箒鞘(名) 毛皮にて造りたる太刀の尻鞘。又は其太刀。

はうきぎ 箒木(名) はゝき木に同じ。

ほうきふ 俸給(名) 給料。

ほういう 朋友(名) 友達。◉友人。

はうめい 芳名(名) 〔一〕芳ばしき名。◉美名。◉令名。〔二〕手紙の詞。他人の名を云ふ敬語。◉御名。

はうめいしゅ 保命酒(名) 銘酒の名。備後の國鞆津の名産。

はうめん 放免(名) 〔一〕罪人を免し放つ事。△(動)—放免す。〔二〕檢非違使廳の下部。◎もと罪人の放免せられしを廳の下部に使ひしより起れる名。

はうめんのつけもの 放免の附物(名) 賀茂祭の日檢非違使廳の下部が綾錦などの衣に花などを飾りたるを着し出づる事あるを云ふ。鉾に屬して行くものなれば附物とは云ふにや。

○徒然「建治弘安のころほ祭の日の放免の附物に。異やうなる紺の布四五反にて馬を作りて。尾髪には燈心をして。雲のいかきたる水干につけて。歌のこゝろなどいひて渡りしこと常に見及び侍りしなども。興ありてしたる心地にてこそ侍りしかど老いたる同士どもの今日も語りはべるなり。この頃ほ附物年を送りて過差殊の外になりて。萬の重き物を多くつけて。左右の袖を人にもたせて。みづからは鉾をだに持たず。息づきくるしむありさまいと見ぐるし」

はふし 法師(名) 僧。●坊主。

ほうし 奉仕(名) 〔一〕奉公に同じ。〔二〕勤務の役。

はうし 拍子(名) 〔一〕拍子に同じ。〔二〕笏拍子の略。

はうし 芳志。芳思(名) 手紙の詞。思召。●御志。●御深情。

ほうし 奉仕(名) ほうしに同じ。○謡曲「ほうしを定め役をなす」

ほふし 法事(名) 佛の祭。●追善。●供養。

はうじ 方士(名) 支那にて方術を行ふ人。●道士。

はうし 榜示(名) 國界郡界等の標に建てたる杭。

ばうし 帽子(名) 冠り物の總名。

ばうじ 房事(名) 男女の交合。

ばうしばな 帽子花(名) 草の名。露草の一名。

ほふしたんやうじ 法師陰陽師(名) 僧の陰陽師を兼業するもの。○宇治「こゝに法師陰陽師紙冠を着て被するを見つけて」

ほうしょ 奉書(名) 〔一〕足利時代に將軍の命を奉じて執事奉行より官民に下したる布達書。〔二〕紙の名。◎奉書を書く用紙の意より起る。

はうしょ 苞苴(名) 苞に包みて物を贈る意味より起りて。◎賄賂。

ほうしょつむぎ 奉書紬(名) 絹布の一種。地の精緻にして奉書の紙に似たるもの。

はうしゃう 褒賞(名) 褒美。●賞與。△(動)—褒賞す。

はうじゃうじゃう 褒狀(名) 褒美の詞を書きたる紙面。

はうじゃうじゃう 芳情(名) 手紙の詞。思召。●芳志。●御深情。

はうしゃうりう 寶生流(名) 能樂の一流。寶生太夫の家に傳來するもの。

はうじゃうゑ 放生會(名) 〔一〕山城男山八幡宮にて八月十五日行はるゝ神事。捕へたる魚鳥を放ち生かす祭。〔二〕他の社寺にて臨時に行はるゝものをも云ふ。

ほうしょく 奉職(名) 官廳に勤務すること。

はうしょく 飽食(名) 飽くまで食ふ事。△(動)—飽食す。

ばうしょく 暴食(名) 亂暴に食ふ事。●大食。△(動)—暴食す。

ばうしょく 望蜀(名) 支那にて隴の國を得たる上に又蜀の地を望むとの意より起りて。◎一つの望を達して又更に他の望を起す事。

はうしん 方針(名) 方法の針路。●方向。●目途。●大體の豫定。

はうしん 芳心(名) 手紙の詞。御心。●芳思。●芳情。

ほふしんわう 法親王(名) 僧に爲り給へる親王。

はうしのたま 寶珠玉(名) はうじゅを見よ。

ばうじぐひ 榜示杭(名) 榜示に同じ。

ほうしゃ 礪砂(名) 礦物の名。=南蠻砂に同じ。

はうしゃ 報謝(名) 〔一〕謝禮。●報酬。〔二〕佛恩に報ゆる爲に金錢物品を僧に寄附する事。

ばうしゃ 暴瀉(名) 甚だしく下痢する事。△(動)—暴瀉す。

ばうじゃくぶじん 傍若無人(句) 傍らに人無きが如く振舞ふ事。●遠慮なく一人にて威張るの意。

ほんじゃくしわう 梵釋四王(名) 梵天、帝釋天、以下四天王の意。(謠曲)

ほうしまらびとのつかさ (名) 官廳の名。支藩寮の一名。◎外國人と僧尼とを掌る役所ゆゑ法師賓客の意。

ほうしご (名) 稻の異名。○散木「おばつかな誰が袖のこに引き重ねほうしごの稻かぶしをめけん」

はうしぎ 拍子木(名) 雅樂の樂器。笏拍子。

ほふしゃ 法主(名) 佛法にて其宗旨の長たる僧。

はうじゅ 寶珠(名) 〔一〕如意寶珠の略。〔二〕火焔のある玉の名。俗にはうしのたまと稱ふるもの。目出度きものとして常に畫かゝる。

ほふみ 法味(名) 佛法の眞味を覺知する事。

ほふみやうし 法名(名) 佛式の諡。●戒名。

はうじゅがしら 寶珠頭(名) 寶珠の形ちしたる欄干などの頭。●擬寶珠。

はうじつ 砲術(名) 大砲を擊つの術。

はうし 報酬(名) 報謝。●謝儀。

はうしうずな 房州砂(名) 安房國平郡より產する細砂。齒磨粉。磨砂の類に用ふるもの。

ほうじゅく 豐熟(名) 豐作。●滿作。●豐年。

ほふしみこ 法師親王(名) 法親王に同じ。

はうひ 放屁(名) 屁をひる事。△(動)—放屁す。

はうび 褒美(名) 褒め稱ふる事。●褒めて物を與ふる事。又賞品。

はうひん 白濱(名) 雅樂の曲名。

はうびき 蠱引(名) 正月にする小兒の遊戲。橙などに糸を附けて一人其結目の處を持ち。他の多人數に糸の端を一本づゝ引かしめ。橙に結び附けたる糸を取り當てたるを勝と定むるもの。

ほうもち 捧物(名) さゝげもの。○源氏「御ほうもちのありさま心ことに所せきまでみゆ」

はうもち 寶物(名) たからもの。(雅)

ほうもつ 捧物(名) さゝげもの。

はうもつ 寶物(名) たからもの。

ほふもん 法文(名) 佛法の經文。

はうもん 砲門(名) 大砲の筒口。

はうもん 訪問(名) 音なふ事。△(動)—訪問す。

はうせい 方正(名) 行の正しき事。△(形)—方正なる(副)—方正に。

はうせい 暴政(名) 暴虐なる政治。

はうせつ 妄說(名) 根據の確かならぬ說。

はうぜん 寶前(名) 神前。●佛前。●廣前。

はうぜん 防戰(名) 防き戰ふ事。△(動)—防戰す。

はうぜん 茫然(副) ぼんやりしたる有樣。(又)—茫然と。(形)—茫然たる。

はうぜんくわ 鳳仙花(名) 草の名。夏の頃紅白染分などに花咲くもの。

はうせう 芒消(名) 礦物の名。朴消を精製したるものにて其色白し。下劑藥として用ふる苦鹽これなり。

はうせき 紡績(名) 糸をつむぐ事。●糸取り。

はうず 奉(他動サ變) (一)たてまつる。●いつきかし

づく。●もりたつる。●大切にする。〔二〕うけたまはる。

ほうず
はうず
封(他動サ變)　領地を與へて其主となす。
報(他動サ變)　〔一〕報ゆる事。●報酬する。〔二〕報知する。●報告する。

ほうず
はうず
扇(自動サ變)　天皇のかくれさせ給ふ。
焙(他動サ變)　火上に載せて乾かす。……茶などに云ふ。

ばうず
ばうず
忘(他動サ變)　忘る。●忘却する。
坊主(名)　〔一〕僧坊の主人と云ふより起りて◎僧侶。〔二〕剃髮したる人の總名。〔三〕德川時代將軍大名の傍に侍して茶の湯其他の雜役を務めしもの。◎剃髮せる故に云ふ。〔四〕剃髮せし頭。またはこれに似たるもの。

はうすん
紡錘(名)　糸を紡ぐ具。●つむ。

はうずむぎ
坊主麥(名)　麥の一種。芒のなきもの。

はうすん
方寸(名)　〔一〕一寸四方。〔二〕心。●思念。●心胸。

ほのに
(副)　ほのかに。●ほのぐ。●ほんのりと。●ちらと。●ちょと。○順集「時鳥きかで待つ夜は明けにけりほのに卯の花白く見ゆ」好忠集「時鳥ほのに初音を聞きしより」

ほのぼの
(副)　ほのかに。●ほんのりと。●うすぐらく。●かすかに。●わづかに。●ちらと。●ちょと。○萬代「霞みゆく彌生の空の山の端をほのぼの出づる十六夜の月」(又)—ほのぼのと。○續拾遺「ほのぐと我住む方は霧こめて芦屋の里に秋風ぞ吹く」

ほのぼのし
(形。形狀言シク活)　かすかなる有樣。○源氏「耳ほのぼのしく傍なる人に問ひ聞きて」

ほのほ
燈(名)　火の穗の意。◎火の燃にあがる先。●火焔。

ほのれもふ
(他動四段)　ほのかに思ふ。●うすぐおもふ。(雅)

ほのか
ほんのり。●かすか。●わづか。●うすうす。●かりそめ。(形)—ほのかなる。(副)—ほのかに。

ほのかたらふ
(他動四段)　ほのかに語らふ。●ちょと話しする。(雅)

ほのぐらし
(形。形狀言ク活)　うすぐらし。○源氏「火ほほのぐらきに」

ほのふむ　（他動四段）　ほのかに踏む。●わづかに踏む。○新古今「かたみとてほの踏みわけし跡もなしここは昔の庭の萩原」

ほのきく　（他動四段）　ほのかに聞く。●うす〳〵聞く。（雅）

ほのめかす　（他動四段）　ほのかに知らする。●うすうす知らする。○後拾遺「霜枯の冬野に立てる村薄ほのめかさばや思ふ心を」

ほのめく　（自動四段）　ほのかに見ゆる。●うす〳〵様子のそれと見ゆる。○六帖「かげろふの人目ばかりはほのめきて」

ほのめき　（名）　身に焼きしめたる香のほのかに薫り來るを云ふ。○源氏「打忍び立ちよらんも物の隈もしろきほのめきの隱れあるまじきに」

ほのみる　（他動一段）　ほのかに見る。●ちらと見る。（雅）

ほのも　（副）　ほのかにも。●かすかにも。●うす〳〵。○堀川「星崎や熱田のかたの漁火のほのも知りぬや思ふ心を」

ほのすく　（他動四段）　ほのかに好む。●かりそめに好む。（源氏）

ほく　（自動下二段）　ほるに同じ。ぼける。●ぼんやりする。●とぼける。●老いぼれる。○源氏「内侍のすけはむげにほけて晝さへ眠りがちにさぶらひ給ふ」

ほぐ　反故（名）　ほごに同じ。紙屑。●書きふるし。

ほぐ　親（他下四段）　いはふ。●親する。●讃め親ふ。

ぼく　木（名）　〔一〕き。〔二〕枝なき木の幹。

ぼく　僕（名）　下男。

ぼく　僕（代）　自分を云ふ。私。●拙者。

ぼく　（自動下二段）　ほくに同じ。ぼける。

ぼくゐ　北緯（名）　地球の赤道より北にある緯度。

ぼくろ　黒子（名）　人の皮膚に附きたる黑き點。●ほくそ。

ぼくば　牧馬（名）　古代琵琶の名器。

ぼくばう　北邙（名）　支那にて古代の火葬場。我京都の鳥部野の如きもの。○謠曲「萩の燒原の跡までも。げに北邙の夕煙」

ぼくと　北斗（名）　星の名。北極の方にありて其數七つ。

ぼくと　墨斗（名）　墨壺。●矢立。

ぼくとつ　木訥（名）　質樸にて口數少なき事。●ぶきっちょう。

ほくだう 北堂(名) 他人の母を尊びて云ふ詞。母堂。●母御。●母君。

ぼくたう 木刀(名) 木にて造りたる太刀。

ぼくだう 牧童(名) 牧畜する童男。●草刈童。

ぼくち (名) 石と金にて打ち出だしたる火を受け取らしむるもの。いちびからにて製し其形黑き綿に似たり。◎火を得る入口ゆゑ火口の意。

ほくてう 北朝(名) 歴史上、光厳、光明、崇光、後光厳、後圓融の五帝を云ふ。此時他の朝廷は吉野に設けられし故これに對して京都のを北と稱へしなり。

ぼくぢやう 牧場(名) 牧畜用の廣場。●まきば。

ぼくちく 撲直(名) 質撲にて正直なる事。

ぼくちく 牧畜(名) 家畜を飼養する事。

ぼくり 木履(名) 下駄。●高下駄。

ぼくる (自動下二段) 糸などの解け亂るゝ。●ほつる。

ぼくだい 墨臺(名) 墨を載せ置く臺。

ぼくそ 火蓑(名) 燃殼。

ぼくそ (名) ほばくそに同じ。ほくろ。

ぼくそわらふ (自動四段) 喜び笑ふ。○盛衰「ともかくも御はからひに從ひ奉るべしとてぼくそわらひて出でられぬ」

ぼくら (名) 〔一〕神寶を入れ置く倉庫。〔二〕社。●祠。

ぼくうつだんをつ 北鬱單越(名) 佛法にて想像國の名。須彌の四州の一つ。……長阿含經に曰く「北鬱單越は地の平なる掌の如く。蚊、虻、蚖、蛇、惡獸なく。四時和順にして寒からず熱からず冬夏あるなし。華菓茂盛にして其土常に自然の粳米あり。云々。形貌常に壯にして閻浮提の二十許の人の相貌の如し。手に種々の樂器を取り絃鼓の音を調へ。妙音を以て和す」と。

ぼくこく 北國(名) 北の國。

ぼくていらく 北庭樂(名) 雅樂の曲名。

ぼくてき 牧笛(名) 牧童の吹く笛。

ぼくぼく 卜居(名) 良き土地を占ひ定めて住む事。△(動)—卜居す。

ぼくきよく 北極(名) 地球の北端。

ぼくきよくせい 北極星(名) 北極の星の名。●北辰。

ぼくめん 北面(名) 白河院の御時より始まりたる院の御所守護の武士。◎院の北向の御殿に其役

所ありたる故に云ふ。

ほぐみ

穂組(名)　〔一〕刈りたる稻穂を組合せ積み置く事。○新撰六帖「秋の田の刈穂の穂組いたづらに積みあまるまで賑ひにけり」〔二〕熟したる稻穂の打ちがひ組合されたるやうに見ゆる事。○萬代「露むすぶ早稻田の穂組うちとけて假庵の床にいやはねらるゝ」

ほぐし

火串(名)　〔一〕照射する時獵人の松明を挾む木。○夫木「五月闇火串の松をしるべにているさの山にともしをそする」〔二〕古へ烽火を燒く臺の上の杭。(和名抄)

ぼくし

牧師(名)　基督教の一教會を管理する職。

ぼくしん

北辰(名)　北極星に同じ。

ぼくしゃ

牧者(名)　基督教にて耶蘇を云ふ。教會信徒を羊に喩へて。

ぼくしゅう

北州(名)　彌法にて想像國の名。須彌の四州の一つ。

ぼぐす

(他動四段)　糸などを解く。

ぼくす

卜(他動サ變)　〔一〕うらなふ。〔二〕物を占ひて吉しゝ定むる。○「家を卜す」

ほや

火屋(名)　火の上に置く蓋。またラムプの蓋ひ。

ほや

老海鼠(名)　海産動物の名。海月の類にして生海鼠の如き疣あり。紫色なるも赤黑きもありて肉は食用となる。

ほや

穂屋(名)　〔一〕薄の穂などにて假初に葺きたる小屋。○續古今「夜寒なる穂屋の薄の秋風にそよさゝ鹿も妻を戀ふらん」〔二〕特には御射山祭の慣例として薄の穂にて葺きたる神殿。此祭は信濃の國諏訪明神の神事にして陰曆の七月二十七日行はるゝもの。○玉葉「尾花ふく穂屋のめぐりの一村にしばし里ある秋のみさ山」

ほや

(名)　宿木の古名。○散木「ふし柴に宿れるほやの已れのみ常磐堅磐に物をこそおもへ」

ほや

(名)　失火の燃ね拔けずして止みたるもの。(俗)

ほやつくり

穂屋作(名)　御射山祭の異名。……穂屋の〔一〕を見よ。

ほやう

ほよの處にあり。

ほやく

補藥(名)　健康を補ふために平生用ふる藥。

持藥。

ほやのあねずり

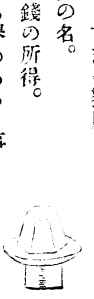
穂屋藍摺(名)　穂屋の模樣を藍にて染めたる衣。(散木)

ほやもり 穗屋盛(名) 古式の饌膳。飯の盛方の名。

ほまち (名) 臨時金錢の所得。

ほまれ 譽(名) 人から譽めらるゝ事 ●名譽。●面目。

ほまへせん 帆前船(名) 帆にて進行する西洋形の船。……蒸氣船に對して云ふ。



ほけ 本家(名) 我生れたる家。●父母の家。……女の嫁したる先にて云ふ詞。○榮花「女君生れ給ひぬ。云々。三日の夜ほけ、五日の夜は撫政殿より、七日の夜は后の宮よりと、さまざまいみじき御うぶやしなひなり」

ぼけ 木瓜(名) 木の名。刺ありて春赤または白の花咲く木。

ぼけぼけと (副) ぼんやりと。●ぼうと。○宇治「ぼけぐとして」

ぼけぼけし (形。形狀言シク活) ぼけたる有樣。●馬鹿らし。(雅)

ぼけだう 法華堂(名) 法華三昧を行ふ堂。○源氏「比叡の法華堂にて」

ぼけた 帆桁(名) 帆を懸くるため帆柱の上に横に渡す木。

ぼけつ 補闕(名) 足らぬを補ふ事。

ぼけづく 法氣付(自動四段) ぼけづくに同じ。佛法臭くなる。●婦者じみる。○濱松「ぼけづきもてなして袈裟うちかけ」

ぼけん 保險(名) 其製造し若くは預りたる物品に損害ある時は自らこれを償ふの責任を負擔して保證する事。……又人の生命に對して死亡の日約束の金額を拂ふべき一種の方法にも云ふ。

ぼけざんまい 法華三昧(名) 專心に法華經を讀誦する事。

ぼけきやうぎう 法華經(名) 佛經の名。釋迦の五番目に說きたるもの。八卷にして二十八品あり。●妙法蓮華經。●妙法華經。●法華八軸。●一乘妙典。●妙典。

ぼけびと ぼけたる人。●老いぼれたる人。○源氏「かの大尼君も今はこよなきぼけびとにて」

ぼふる 屠(他動四段) ぼふるに同じ。打ちやる。●投げ捨つる。●ぼうりだす。○盛衰「血體をぼふり身躰を拋つても」

ほこ

鉾。矛(名)　(一)古代の武器。長き柄の先に諸刃剣形の身をかりて後世の鎗に似たるもの。……今は祭禮、舞樂などに用ふ。(圖)又總體木製にて竹鎗の如く先を尖らしたるもあり。記に見ねたる「柊の八尋矛」など之に屬す。(二)すべて鉾に似て長く尖りたるものを云ふ。○「鉾杉」「鉾木」(三)京都祇園祭などに出づる鉾を飾りたる車。

ほご

反故(名)　ほぐに同じ。書きふるしの紙。●書損の紙。

ほご

保護(名)　現在の狀態に從ひて守護する事。△(動)―保護す。

ほころぶ

綻(自動上二段)　(一)縫目の解くる。(二)物事の破れ初むる。(三)花の咲き初むる。(四)笑ふ。

ほころび

綻(名)　綻ぶる事。●綻びたる處。

ほことり

鉾取(名)　鉾を色々に弄ぶ遊戯。(和名抄)

ほことん

(名)　或人矛楯の文字をホコトンと讀み誤りたるより起る。◎(一)物知らぬより出でたる誤り。(二)滑稽嘲罵の語氣にて云ふ時矛楯の意。

ほこり

埃(名)　塵。●ごみ。

ほこり

誇(名)　誇る事。●自慢。

ほこりはらひ

埃拂(名)　塵拂。●はたき。

ほこりか

誇り顏。●誇らはしげ(形)―ほこりかなる(副)―ほこりかに。

ほこる

誇(自動四段)　(一)我すぐれたる事を示す。●自慢する。●威張る。(二)滿足して居る。●歡びて居る。●榮ゆる。

ほこだいこ

鉾太鼓(名)　樂太鼓の一名。◎火焔の處尖りて鉾に似たる故。(江家次第)

ほこだち

鉾立(名)　門の扉の左右の柱＝方立に同じ。

ほこたれ

架垂(名)　ほこざぬに同じ。

ほこだて

鉾立(名)　ほこだちに同じ。

ほこつづみ

鉾鼓(名)　ほこだいこに同じ。

ほこら

祠(名)　ほくらに同じ。小さき社。

ほこらはし

(形。形狀言シク活)　自慢らしき有樣。●滿足なる有樣。●威氣揚々。

ほこらかす

(他動四段)　誇らしむる。

ほこらし

(形。形狀言シク活)　誇らはしに同じ。

ほかう 歩行(名) あゆみ。△(動)―歩行す。

ほこう 母公(名) 他人の母を尊びて云ふ詞。御母上樣。

ほこさき 鋒(名) 刃の切っ先。

ほこぎ 鉾木(名) 〔一〕欄干の圓錐形なる柱。●唐金にて寶珠の玉に似たる飾せしもの。〔二〕鷹屋にて鷹の留り木。

ほこぎぬ 架衣(名) 鷹屋の鉾木に垂らしたる衣。鷹に着するもの。

ほこゆけ (句) 鉾行かせの約。◎鉾を揮ひて敵に向ふを云ふ。○記「ほこゆけ矢さして」

ほごす (他動四段) 〔一〕糸などを解く。〔二〕土灰などの中より物を搔き起す。

ほこすぎ 鉾杉(名) 先尖りて直立したる杉の木。(雅)

ほえ 吠(名) 吠ゆる事。

ほて 帆手(名) 舟の具。○土佐日記抄に曰く「帆の横に繩を多く附けて右へも左へも開かんとする綱をほてと云へり」

ほて 最手(名) 中古時代相撲取の頭。今の關取に當る。

ほてい 布袋(名) 〔一〕七福神の一つ。僧にて滿腹柔和の容體をあらはし。常に多數の唐子ありて之を取り圍む。〔二〕肥ゆたる物の形容。

ほてい 拂底(名) ふっていに同じ。物の乏しき事。△(動)―ほていす。○空穗「馳走せんと思ひ侍りつれどかくの如くほていし侍りつる程に」

ほてり (名) ほてる事。

ほでり (名) 火照の意。◎〔一〕のぼせて顏の熱く赤くなる事。〔二〕顏を赤くして怒る事。〔三〕夕燒。○新撰六帖「山の端にほでりせる夜は室の浦に明日は日和と出づる舟人」

ほてる (自動四段) 火照の意。◎のぼせて顏の熱く又赤くなる。

ほてうつ (自動四段) 兩手を拍つ事。歡ぶ時の所爲。○土佐「追風の吹きぬる時は行く舟のほてうちてこそうれしかりけれ」

ほあん 保安(名) 治安を保護する事。

ほさ 輔佐(名) 幼君主などをたすけて後見する事。また其役。

ぼさ 菩薩(名) ぼさつの略。

ぼさい 補祭(名) 希臘教の教職の名。

ぼさつ 菩薩(名) ぼさつに同じ。(源氏)

ぼさを 帆竿(名) 帆柱の一名。

ぼさつ　菩薩。开(名)　菩提薩埵の意。◎〔一〕佛教にて佛の次に位する尊き階級。大方は佛と同じ意に用ふ。……井と書くは菩薩二字の草冠を取りて合せたる略字。〔二〕雅樂の曲名。〔三〕米の異名。

ぼさつかい　菩薩戒(名)　菩薩の位に進まんとするものの保つべき佛法の戒律。一に不殺、二に不盜、三に不淫、四に不妄語、五に不酤酒、六に不說過罪、七に不自讚毀他、八に不慳、九に不瞋、十に不謗三寶。

ぼさん　墓參(名)　はかまゐり。

ぼざく　(他動四段)　祝ふ。●祝言を述ぶる。(古)

ぼざくる　(他動四段)　しゃべる。●口をたゝく。(俗)

ぼき　穗先(似)　稻の穗。鎗の穗などの先。

ぼき　(名)　危險なる片山岸。○夫木「危さに人目ぞ常によがれける岩の陰蹈むほきのかけみち」

ぼぎ　簿記(名)　ぼきほふの略。

ぼぎ　母儀(名)　他人の母を少し尊みて云ふ詞。母人。

ぼきほふ　簿記法(名)　金錢の出入を帳簿に附くる一種の術。

ぼきぢ　(名)　山岸の危險なる路。○山家集「吉野山ほきぢづたひに尋ね入りて花見し春は一昔かも」

ぼざこと　祝言(名)　祝の言葉。●神に祈る言葉。

ほゆ　吠。吼(自動下二段)　〔一〕犬、狼、虎、獅子の鳴く。……犬には吠の字。他のものには吼の字。〔二〕吠ゆるに似たる聲の響く。○「吼ゆる波」「吼ゆる風」

ほめたつ　譽立(他動下二段)　譽めて持ち上げる。

ほし　星(名)　〔一〕夜の空に點の如く輝く無數の光。〔二〕殊には七月七日に祭らるゝ牽牛。織女の二星。〔三〕又其年の廻り合せによりて人の運命を司る星。○「星がわるい」〔四〕神樂歌の曲名。〔五〕點。

ほし　欲(形。形狀言シク活)　望まし。●我物にしたし。●ものほしい。

ぼし　母子(名)　母と子と。

ぼし　墓誌(名)　其人の履歷などを金石類に彫りて墓に埋むるもの。

ほしひぃ　乾飯(名)　ほしいひの略。

ほしいひぃ　乾飯(名)　飯の乾したるもの。○字治「餌袋にほしいひなど入れて」

ほしいな　乾魚(名)　干物(ひもの)。

ほしいまま　恣(名)　ほしきまゝの音便。△(形)—ほしいまゝなる。(副)—ほしいまゝに。

ほしいし　星石(名)　流星の地上に落ちたるもの。●星屎。●隕石。

ほしとり　乾鳥(名)　食用のため乾したる鳥。○空穂「雲雀のほしとり」

ほじる　(他動四段)　穴の中より小さき物を堀り出す。

ほしをいただく　星を戴く(句)　(一)曉早く星の光を戴きて家をいづるを云ふ。(二)年老いて星の光の如き白き髪を戴くを云ふ。

ほしをとなふ　星を唱ふ(句)　昔し正月元日朝廷の御儀式にある事。四方拜の時天皇萬星の名を唱へさせ給ふを云ふ。○年中行事歌合「すべらぎの星を唱ふる雲の上に光のどけき春は來にけり」

ほしをつらぬ　(句)　後漢書に官上應二列宿一出宰三百里一とあるより出でゝ。◎百官の朝廷に並み列なる形容。○風雅「立ちそむる春の光と見ゆるかな星をつらぬる雲の上人」

ほしか　干鰯(名)　干したる鰯。肥料と爲すもの。

ほしがる　(他動四段)　欲しく思ふ。

ほしかげ　星鹿毛(名)　馬の毛色の名。白星のある鹿毛。

ほしかぶと　星兜(名)　星の如く銀の鋲(びやう)を打ちたる兜。

ほじょ　補助(名)　足らざる處を助くる事。又その役。△(動)—補助す。

ほしょう　保證(名)　受け合ふ事。●證據立て。△(動)—保證す。

ぼしょく　暮色(名)　夕暮の景色。

ほしづくよ　星月夜(名)(枕)　ほしづきよに同じ。

ほしづきよ　星月夜(名)　月の如く星の光の明るき夜。

ほしづきよ　星月夜(枕)　鎌倉の枕詞。星月夜は月に比ぶれば薄暗き處あるゆゑ暗を倉に掛けていふ。○謠曲「葛野の鹿の星月夜鎌倉殿の御獵の御遊」

ほしづめのまつり　鎮火祭(名)　ひしづめのまつりに同じ。

ほしうり　乾瓜(名)　食用に供したる瓜。○宇治「御盤に白き乾瓜三寸ばかりに切りて十ばかり盛りたり」

ほしのはやし　星の林(名)　空に星の多きを林に喩へて云ふ。○新撰六帖「いつも見る空の綠は常

磐にて星の林の影かはらぬ」

ほしのり 乾海苔(名) 乾したる食用の海苔。

ほしのくに 星國(名) 天竺の一名。

ほしのくらゐ 星の位(名) 殿上人を云ふ。……ほしをつらぬを見よ。○新古今序「星の位政を佐けし契を忘れずして」

ほしのやどり 星の宿(名) 〔一〕天上にて星の位置。〔二〕ほしのくらゐに同じ。

ほしのまぎれ 星の紛(名) 星明りのまぎれ。●くらまぎれ。○夫木「有明の曉よりもうかりけり星のまぎれの宵の別れは」

ほしく 星供(名) 陰陽師の星祭に備ふる供物。

ほしくそ 星屎(名) 星石の異名。

ほしゃく 保釋(名) 法律上の詞。裁判所に保證金を預かりて未決囚の罪人を自宅に歸らしむる事。

ほしまよふッ 星迷ふ(句) 夕暮方種々の星のあちらこちらと追々に現はるゝを云ふ。○中務集「星まよふほどを待つて七夕の安き空なき雲井なりけり」

ほしまつり 星祭(名) 〔一〕七夕祭。〔二〕眞言宗にてする人の運命を守る星の祭。〔三〕又陰陽師の

する九曜七星の祭。

ほしこ 干海鼠(名) 生海鼠(なまこ)の干したるもの。

ほしあひイ 星合(名) 〔一〕七月七日天上にてありと云ふ牽牛、織女、二星の會合。○延文百首「雲井より雲井をあふぐ星合に思へば遠し天の川浪」〔二〕星合の空の略。○源氏「つれづれにながめくらし給ひて星合見る人もなし」

ほしあひのそら 星合の空(名) 七月七日の夜の空。……ほしあひを見よ。

ほしあはび 干鮑(名) 鮑の干し固めたるもの。

ほしあかり 星明(名) 地上を照らす星の名。

ほしきまま 恣(名) 氣儘。●我儘勝手。△(形)ほしきまゝなる。(副)—ほしきまゝに。

ほしゅ 保守(名) 舊態を保存する事。

ぼしゅん 暮春(名) 春の終。太陰曆の三月。

ぼしふッ 募集(名) 人數をつのりあつむる事。△(動)—募集す。

ぼしうシュ 暮秋(名) 秋の終。●太陰曆の九月。

ほしめがね 星眼鏡(名) 天文を觀測する眼鏡。●望遠鏡。

ほしみせ 星店(名) 路傍に莚など敷きて品物を並ぶる

店。●てんとうみせ。

ほじし 脯(名) 乾したる肉。

ほしもの 乾物(名) 洗濯して日に乾したる衣類。

ぼひ 墓碑(名) 碑文を彫りて墓に建つる石。

ほびろかに (副) はびこりて。●跋扈して。○水鏡「道鏡もいまだほびろかに參り仕う奉らざりしかば」

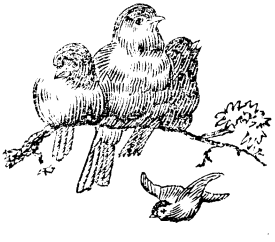
ぼへう 墓表(名) 墓じるし。多くは四角なる木に死者の名、死者の月日など記して石碑の出來るまで建て置くもの。

ほびころ (自動四段) はびころ。●廣がる。○萬葉「此見ゆる雲はびこりて。とのぐもり雨も降らぬか。心足らひに」

ほもめん 帆木綿(名) 舟の帆に作る料の綿。

ぼぜん 墓前(名) 墓の前。

ほす 乾。干(他動四段) かわかす。●水分を無くする。

ぽすぽる (名) 英語より來る。◎燐火。

ほずゑ 穂末(名) 草の穂先。○萬代「風吹けば穂末かたよる秋の田の」